

[資料]

神像に見る身体表現の比較考察

—サラスヴァティー神と弁才天の場合—

金 田 英 子

(平成 3 年 11 月 15 日受付, 平成 3 年 12 月 6 日受理)

Comparative Study of Physical Representation
Observed in the Images of the Gods

—Cases of Sarasvatī and Benzaiten—

Eiko KANEDA

はじめに

ネパールにおける諸宗教の中で、ヒンドゥー教は 89.5% (1981 年国勢調査)¹⁾ と国民の大多数を占めている。だが、このヒンドゥー教を定義することは極めて困難なことである。なぜなら、ヒンドゥー教は、広大なインド亜大陸の数千年の歴史の中で生まれた諸種の系統の信仰や習俗を、ほとんど無原則に取り入れ今日のように発展させた宗教だからである。したがって、そこでは当然のことながら統一的教義を語ることは不可能であり、そのような多様性が、あるいは仏教との文化的複合を容易にしたものと考えられる。

ところで、今日の日本に見られる仏像の数々はその起源をヒンドゥー教の中に見い出すことができる。例えば、ヒンドゥー教神として崇められているインドラ神やブラフマー神は仏教では帝釈天や梵天に相当する。また、宮坂有勝氏は、仏教における女神の中で、ヴェーダ²⁾の女神に起源する神として、吉祥天(ラクシュミー神)と弁才天(サラスヴァティー神)を挙げている³⁾。しかし、このように同一視されているそれらの神々も個々を比較して見ると、信仰対象や宗教儀礼など様々な相違点が指摘される。つまり、ある種の神像は、インドから中国を経て日本に伝来される過程において、長い年月とともに、土着の宗教と結びつきながら独自の身体的特徴を築き上げてきたといえる。したがって、それぞれの神々の姿態を明らかにすることは、同時にその社会集団に潜在している文化的特徴を浮き彫りにすることにつながる

いえよう。

そこで本稿では、ヒンドゥー教の色彩が濃いインド・ネパールにおけるサラスヴァティー神信仰と日本における弁才天信仰を比較検討し、双方における身体表現の相違に考察を加えるものとする。

1. 信仰の由来

サラスヴァティー神(सरस्वती)の「サラス」とは水の意味で、サラスヴァティーとは水を持っているもの、または水の流れの美しさからきた優美なものの意味であるが、本来はサラスヴァティー河の名であり、古代インドに移住してきたアーリア族が、その地方にあった大河に対して名づけた名前である⁴⁾。

もともと河の神であったサラスヴァティー神が学問の神となったのは、『リグ・ヴェーダ』に出てくる言語の神の女神ヴァーチュと結びつき、同じ神と考えられるようになったためだと伝えられている。さらに、弁舌の神であるサラスヴァティー神はヒンドゥー教の三大神⁵⁾ブラフマー神の舌に住むとも言われ、64の技芸を司る女神として尊崇を集めているだけでなく、彼の妃とも言われている。

このように、サラスヴァティー神は、河の神、学問や弁舌の神としてその信仰を集めていたが、バラモンの聖典と言われている『リグ・ヴェーダ』では、また、サラスヴァティー神について次のように語られているので、関連箇所を挙げてみよう⁶⁾。

1. 奔湍と滋養とをもって、このサラスヴァティーは流れいであり、〔敵に対する〕要害として、金属の防壁として、車道によるがごとく、大河は〔その〕威力により、他のあらゆる水流を〔後に〕押しやりつつ進む。
2. 諸川の中にただ独り、サラスヴァティーはさわかち勝れり、山々より海へ清く流れつつ。広大な世界の富を知りて、ナフスの族〈うから〉（人類）にグリタと乳とをいだしきたれり。
4. またかの名高き・恵み深きサラスヴァティーは、この祭祀において、快く享けてわれらに耳傾けんことを、膝を直ぐ立てたる項礼者により祈願せらるる〔女神〕は。彼女は富を伴侶とし、〔あらゆる〕友（他の河川）に勝る。

以上のことから、サラスヴァティー神はリグ・ベータが完成された時代にはすでに、財富の神としての性格を有していたと言えよう。

ところで、今日のネパールにおいては、サラスヴァティー神は学問の神様としての尊崇が高い。それはサラスヴァティー信仰が、学校教育の場においても培われているからに他ならない。例えば、私立で使用されている小学校3年生国語の教科書⁷⁾に、「サルサティープージャ⁸⁾」が取り扱われている。以下にその内容を翻訳してみることしよう。

サルサティープージャ

サルサティープージャは寒い時季に行われます。サルサティープージャの日には、私たちはサルサティー寺院に行きます。サルサティーに祈ります。プージャをします。私たちは家で本にプージャをします。ノートやペンにプージャをします。

サルサティーは知恵の神様です。サルサティーを祝福すると知恵が身につきます。勉強ができるようになります。学ぶべきことは本に書かれてあります。本に姿がなくてもサルサティーは本にいます。私たちが本を汚したり、本を投げたり、本を破ったりするとサルサティーは怒ります。サルサティーを怒らせると勉強ができなくなります。

サルサティーの写真または像を見てごらん下さい。サルサティーには4本の腕があります。1本の腕にはサルサティーも本を持っています⁹⁾。本を読んで努力しています。私たちも本を読んで努力しなければなりません。サルサティーのもう一方の手には数珠を持っています。数珠は数を数える役目をします。サルサティーは手に数珠を持って何をするかという、私たちが何時間勉強するかを数えます。

何時間勉強しなかったかということも数えます。どれだけ良い行いまたは悪い行いをしたかも数えます。私たちは一つたりとも悪い行いをしてはいけません。

サルサティーは2本の腕でヴィーナ¹⁰⁾を持っています。ヴィーナから快い音を出します。ヴィーナの音はみんなが好みます。私たちも良いことを言わなければなりません。私たちは悪いことを言って喧嘩をしてはなりません。

サルサティーは白い服を着ています。白は純粹を意味します。私たちも自分の心を常に純粹な状態にしなければなりません。心が濁っていると人間は悪い行いをします。そのような人は勉強もできません。

サルサティーはアヒルに乗っています。アヒルも白色をしています。アヒルは牛乳と水が混ざっているところから牛乳と水を別々にします。私たちも勉強をして良いことと悪いことが判るようにならなければなりません。悪いことを言ったりしたりしてはいけません。良いことを言ったり良いことだけをしなければなりません。

このように良いことだけをし、良いことだけを言い、心を純粹に保ち、本を読む努力をすれば私たちは勉強ができるようになります。私たちは賢い人になります。

この教科書の内容からは次の点が指摘される。最初に、サラスヴァティーは知恵の神様であるということ。そしてサラスヴァティー神は四臂で、その2本の手はヴィーナという楽器を、残す2本の手はそれぞれ、本と数珠を持っていること。さらに、ヴァーハナ（乗り物）がアヒルであるということである。

ところで、現在ネパールでは教育文化省が定めている学校教育の「課外教育活動」の中で、サルサティープージャは「できるならば実施した方が望ましい」項目として奨励している¹¹⁾。その結果校地内にサラスヴァティー寺院を建てている学校も多く見受けられる。

以上のことから、サラスヴァティー神の信仰対象は今日もお河の神、学問や弁舌の神、そして音楽の神にあるという根本概念は変わらないものの、一方では学校教育の場において学問の神様として人々の尊崇を推しつつあることも見逃せない。

ところで、弁才天は古代インドに発生した水の神サラスヴァティーのことである。したがって、梵語サラスヴァティー Sarāsvatī の訛略で、薩羅婆嚩底と音写される。

日本における弁才天信仰は、史料的には中国の義浄が、唐の中宗嗣聖 20 (703) 年に『金光明最勝王経』10 巻を漢訳したところ、その中に吉祥天と弁才天の功德が説かれていたために造像したことにまで遡ることができる¹²⁾。そしてそれが、奈良時代に日本に伝来され、国家仏教の中に取り入れられていった。しかし、当時は独尊として祀られ、また信仰された形跡はない。

弁才天が主尊として祀られるようになったのは、平安時代頃からと推定される。それは本地垂迹の説による神仏混淆で日本古来の神と習合し、神道系の信仰と仏教系の信仰が合体したので、にわかに弁才天信仰が盛んになっていったためだと言われている。

また、弁才天は吉祥天とともに古来多くの大衆によって尊崇されてきたが、神仏習合の影響によって、必ずしも寺院に安置されていなかった。特に明治以降は、神仏分離によって多くが神社に祀られることになった。

今日特に有名な弁才天には、日本三弁天とよばれている、琵琶湖の竹生島・広島宮島の宮島、神奈川の江ノ島の弁天であるが、この三つに、大和の天川と陸前の金華山の弁天を加えて五弁天（天川を除いて富士山の弁天を加えることもある）とすることがある。そうして五大弁才天はそのものすべてが、海岸、湖、河川といった水に関係する地に祀られている。

2. 身体的特徴および宗教儀礼の相違

サラスヴァティー神の特徴は、絵・写真あるいは神像から観察することができる（図 1）。

それらは、ふつう一對の腕に数珠とヴェーダ（長方形に切った椰子の葉に文字を書いて糸でとじたもの）を持ち、もう一對の腕にはヴィーナという楽器を抱えている。傍らにはサラスヴァティー神のヴァーハナ（乗り物）である孔雀がひかえ、背後には河が流れている。このことから、元来は河川の女神であったことが伺われるが、絵・写真によっては孔雀の代わりにアヒルが描かれている場合もある。また、多臂で表されるサラスヴァティー神の場合には、数珠、本、縄、ヴィーナ、水瓶などを持っている。四臂の時には、一本の右手が一茎の花を差し出し、もう一方の右手は本をもち、二本の左手がそれぞれ数珠と小太鼓をもっていることもある。どの図像的表現をとってみても共通して言えることは、額にティカ¹³⁾と呼ばれる赤い印をつけていることである。さらに、神像の多くは、艶姿あらわな裸体か、裸身に近い薄衣をまとった姿で表現されており、二つの腕を伏せたような乳房をしている。

ヒンドゥー教において、サラスヴァティー神のプー

ジャは陰暦によって定められる。すなわち、毎年ビGRAM 暦の 11 月（西暦の 1～2 月頃）¹⁴⁾、スリーパンチャミーの日¹⁵⁾に行われる。プージャの際に用意される供物は地方により若干の異なりはあるものの、花、アビール¹⁶⁾、線香、新鮮なバター¹⁷⁾、ヨーグルト、牛乳、胡麻菓子、新鮮なサトウキビ、氷砂糖などがあげられる。

では、ここで当日の巡礼に方法について簡単に触れておくことにしよう。

1) 早朝水浴びをし、衣装を替える。

2) 寺院へ行くまでは、果物、紅茶以外は口にしてはならない¹⁸⁾。

3) 先に述べたプージャの供物を用意し、サラスヴァティー寺院へ行く。（寺院の中では皮製品を身につけてはならない¹⁹⁾。中には素足で入る。）

4) 線香をたき、供物を少しずつ置く。

5) 神像の足元に自分の額を軽くつける²⁰⁾。

6) ティカと少々の花をとる。

7) 寺院を時計まわりに一周する²¹⁾。

このようにして今日においてもサラスヴァティープージャは定められたしきたりにもとづきながら人々の生活の一部となっているといえよう。

他方、弁才天の形像は、『金光明最勝王経』には八臂像（図 2-1）がとかれているが、鎌倉時代以降の作例では、二臂像（図 2-2）で、琵琶を奏する像が見受けられる。つまり、伎楽の神としての要素が加わってくる。このように、弁才天の図像的表現は八臂または二臂で、琵琶を持つことがある。

ところで七福神（図 2-3）の信仰は、室町時代に始まり江戸時代に最盛期となるが、その中には唯一の女神として「弁財天」²²⁾が含まれている。

また弁才天は、江戸時代において、もとの姿が蛇神であるということから、水に縁のあるところに祀り、好物の卵を備えたり、蛇の彫刻を飾ったりする慣習が生まれた。

おわりに

ヒンドゥー教において妙音と能弁の女神とされ信仰され続けているサラスヴァティー神（सरस्वती）は、日本に伝来すると弁才天となる。そして単に名称が変わるだけでなく、双方の崇拝には多くの相違点を指摘することができる。

例えば、今日のヒンドゥー社会においてサラスヴァティー神は、河の神としての伝統を残しながらも、どちらかと言えば学問の神様としての尊崇が強い。それに対し、弁才（財）天は一般に湖や海の神として、あるいは

七福神の中の一神として信仰を集めている。また、容像についても、サラスバティー神がアヒルの上でヴァーチェを手にしている姿を挙げるのならば、弁才（財）天では、龍の上で琵琶を奏でている姿を相応させることができる。

この様に、サラスバティーと弁才（財）天との本源には共通の概念がありながらも、数々の相違点が指摘されるということは、換言するならば、神像に対する信仰が、土着宗教との習合をはじめとする様々な文化的影響を受けながら、意図的に行われていった結果であると考えられる。なぜならば、その土地に適したご利益があるとか、あるいはその土地の人々の思想になかった身体的特徴を神像が有していなければ、人々の信仰の対象とは成り得ず、排他的な方向へと追いつめられて行ったと考えられるからである。それだけに人々の信仰心は古今を問わず、それぞれの民俗や生活習慣と深い結びつきをもっていえると言えよう。

注 記

- 1) 『東南アジア要覧 (1990 年度版)』東南アジア調査会。
- 2) ヴェーダはバラモン教の根本聖典の総称であり、『リグ・ヴェーダ』『サーマ・ヴェーダ』『ヤジュル・ヴェーダ』『アタルヴァ・ヴェーダ』の四種がある。中でも、リグ・ヴェーダは、インド・ヨーロッパ人の有する最古の文献とされており、ほぼ、世紀前 1300～前 1000 年に作成されたと言われている。
- 3) 『仏教と神々』大法輪閣, 1987 年, pp. 140-141。
- 4) サラスヴァティーは東パンジャブ地方にあった河で、『リグ・ヴェーダ』以後、一千年のうちに干上がってしまったと推定されている。
- 5) ヒンドゥー教の三大神とは、宇宙の創造神であるブラフマー神、宇宙の維持神であるヴィシュヌ神、宇宙の破壊神であるシヴァ神をいう。
- 6) 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ賛歌』岩波書店, 1986。
- 7) ネパールでは、私立学校に対し特に教科書の指定を行っていない。
- 8) 日本では通常「サラスヴァティー」と表記されるが、原文を直訳すると「サルサティー」となる。ヒンドゥー教では神の礼拝のことをプージャという。プージャでは、神像の中に神が請じ入れられ、その神像の前にはさまざまな供物が置かれる。
- 9) これは『リグ・ヴェーダ』のことである。
- 10) インド地方にある民族楽器のこと。
- 11) 課外教育活動は、「必ず実施しなければならない」、「実施しなければならない」、「できるならば実施した方が望ましい」という項目に分かれている。
- 12) ヒンドゥー教の概念を受けて仏教に弁才天を取り入れたのが『金光明最勝王経』で、弁才天はこの経を説く人に知恵や長寿や財産を授けると述べている。
- 13) ティカはヒンドゥー教の象徴でもある。シバ神の場合には赤色の粉の代わりに「灰」をつける。
- 14) ビグラム暦とは、ビグラム王の誕生をゼロとした、インド・ネパール地方で用いられている暦のことである。西暦の 1991 年はビグラム暦の 2048～49 年にあたり、新年は西暦の 4 月中旬となる。
- 15) 新月より数えて 5 日目に相当する。
- 16) アビールも赤色の粉のことであるが、ティカと区別されている。また、既婚女性はその証としてアビールを、髪毛の分け目につけるとするのがヒンドゥー教の慣習である。
- 17) ここでの「新鮮」は厳密に言えば、「けがれていない」の意である。
- 18) ヒンドゥー教において、果物と紅茶は「不浄なもの」とみなされない。
- 19) ヒンドゥー教は「牛」を神として崇めているため、聖地での皮製品着用を禁じている。
- 20) ヒンドゥー教において、神の前でこの動作をおこなうことは神に対する最高の敬意とされている。
- 21) ヒンドゥー教では、左手が不浄とされているため、右肩を寺院方向に向けて一周するしきたりがある。
- 22) 多くの文献では、「弁才天」と「弁財天」の 2 つの漢字を用いているが、学芸の神の場合は「弁才天」とし、財富の神の場合は「弁財天」と表記するのが適切であろう。

主要参考文献

- 1) 'सरस्वती उपासना' बिहार आफरिट प्रिंटर्स, दिल्ली, १९८६.
- 2) 'महाकौ स्तोत्र' बौद्धी प्रिन्टर्स.
- 3) 'अतिरिक्त कार्यकलापको निर्देशन पुस्तिका पाठ्यक्रम पाठ्यपुस्तक तथा निरीक्षण विकास केन्द्र, पल्लपुर, २०४४.
- 4) 'सरल बाल निबन्ध ज्ञान' पुस्तक प्रसाद बराल र लोहामान सिंह, काठमाडौं.
- 5) 'अमर बाल शैक्षिक ३' बौद्ध उपाध्याय, काठमाडौं.
- 6) 笹間良彦『弁才天信仰と俗信』雄山閣出版, 1991 年。
- 7) 立川武蔵他『ヒンドゥーの神々』せりか書房, 1988 年。
- 8) 大法輪編集部編『仏教と神々』大法輪閣, 1987 年。
- 9) 長谷川明『インド神話入門』新潮社, 1989 年。
- 10) 栗田靖之他『ヒンドゥー教世界の神と人』関西テレビ放送, 1991 年。
- 11) 『東南アジア要覧 1990 年度版』東南アジア調査会, 1991 年。



図 1. サラスヴァティー神



図 2-1. 八臂の弁才天



図 2-2. 二臂の妙音弁才天

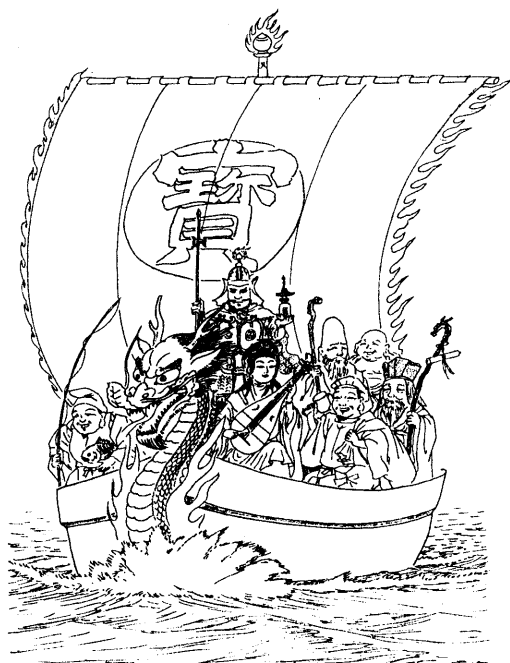


図 2-3. 宝船と七福神

出典：図1. 'मटेन्द्र माला कथा-२' विषयम्भर हिसिरे,
जनक शिक्षा सामग्री केन्द्र लिमिटेड, २०४४.
図2. 笹間良彦『弁才天信仰と俗信』雄山
閣出版, 1991